



No.57 2026.06

土木史フォーラム

Newsletter of Committee on the History of Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

目次

フォーラム	第1回土木史広報シンポジウム 開催報告 —土木史を伝え、未来へつなぐ試み—	松永 昭吾	1
地域のニュース1	地域への恩返しと花峯橋の復原	竹山 廉斗	5
地域のニュース2	「アートでつなぐ旧晴海鉄道橋展」開催報告	藤間 さちお	8
学会の動き	第10回土木史サロン 開催報告	白木 綾美	11

フォーラム

第1回土木史広報シンポジウム 開催報告 —土木史を伝え、未来へつなぐ試み—

土木史広報小委員会 委員長 松永昭吾

1. はじめに

土木史は、土木技術や社会基盤の形成過程を明らかにする学術分野であると同時に、私たちの社会や暮らしがどのような選択と経験の積み重ねの上に成り立ってきたのかを理解するための重要な手がかりを与えるものである。しかし、その成果や意義は、必ずしも社会一般に十分共有されてきたとは言い難い。専門的な研究の蓄積と、社会への発信との間には、なお大きな隔たりが存在している。

こうした問題意識のもと、土木学会土木史委員会では、研究成果を学会内部にとどめるのではなく、広く社会と共有し、次世代へとつないでいくための取り組みとして、土木史広報小委員会を中心に活動を進めてきた。土木史フォーラムや土木史サロンなどの継続的な実践は、その一環として位置づけられるものであり、研究者・実務者・市民が土木史を媒介として交流する場を形成してきた。

一方で、災害の激甚化や社会構造の変化が進む現代において、過去の経験や教訓をどのように読み解き、現在の課題に生かしていくのかという問いは、これまで以上に切実なものとなっている。土木史は、単なる過去の記録ではなく、現代社会の意思決定や将来の選択を考えるための知的基盤として捉え直される必要がある。

このような背景を踏まえ、「土木史を伝え、未来へつなぐ」をテーマとして開催されたのが、第1回土木史広報シンポジウムである。本シンポジ

ウムは、土木史広報のこれまでの歩みを振り返るとともに、災害史や教育、次世代への継承といった視点から、土木史を社会にどう伝え、どのように生かしていくべきかを多角的に議論することを目的とした。本稿では、その開催概要と主な内容を報告し、今後の土木史広報の展望について整理する。

2. 第1回土木史広報シンポジウムの概要

第1回土木史広報シンポジウムは、2026年3月31日（火）14時から17時まで、土木学会講堂を会場として開催された。会場での対面参加とオンライン配信を併用したハイブリッド形式で実施され、土木史に関心を持つ研究者、実務者、教育関係者など、幅広い層が参加する場となった。図-1に石橋知也土木史広報小委員会幹事長（長崎大学）作成のフライヤーを掲載する。

本シンポジウムは、土木学会土木史委員会が主催し、土木史広報小委員会が企画・運営を担ったものである。プログラムは、開会挨拶および土木史広報小委員会による活動報告に続き、特別講演、対談、教育実践の紹介という構成で編成され、土木史広報を多角的に捉える内容となっていた。

当日は、年度末の平日開催にもかかわらず、会場参加とオンライン参加を合わせて275名の参加があり、土木史を社会に発信する取り組みに対する関心の高さがうかがわれた。対面・オンライン双方からの参加により、地理的な制約を超えた



土木史を伝え、未来へつなぐ、

日時：2026年3月31日（火） 14:00 - 17:00

場所：オンライン配信

土木学会2階講堂での対面参加も可能

参加費：無料 / 申し込み：必要



14:00~14:05	開会挨拶 田中尚人(熊本大学/土木史委員会委員長)
14:05~14:30	活動報告 石橋知也(長崎大学/土木史広報小委員会幹事長)
14:30~15:30	特別講演「(仮) 災害史と災害伝承」 小長井一男(東京大学名誉教授 /土木学会地震防災技術の伝承・教育に関する検討小委員会 委員)
15:40~16:20	対談「土木史広報のこれまでとこれから」 緒方英樹(前土木史広報小委員会委員長) 松永昭吾(土木史広報小委員会委員長)
16:20~16:50	義務教育における土木史教育の実践例 土木史広報小委員会
16:50~16:55	閉会挨拶 松永昭吾(前橋)

写真：白水溜池堰堤

図-1 シンポジウムフライヤー

情報共有と議論の場が実現した点も、本シンポジウムの特徴の一つである。

全体を通して、単なる研究成果の紹介にとどまらず、土木史をいかに社会と共有し、次世代へとつないでいくかという視点が一貫して示された。第1回という位置づけにふさわしく、今後の土木史広報の方向性を考えるための基礎的な論点が整理されたシンポジウムであったと言える。

3. 土木史広報小委員会の活動報告と問題提起

土木史広報小委員会は、土木史研究の成果を専門家の間にとどめることなく、広く社会と共有することを目的として設置され、これまで多様な広報活動を展開してきた。その中心的な取り組みとして挙げられるのが、定期刊行物である「土木史フォーラム」、対話型の企画として実施されてきた「土木史サロン」、ならびにウェブサイトやSNSを通じた情報発信である。

「土木史フォーラム」は、研究成果の紹介に加え、地域に根ざした土木史の事例や実践的な取り組みを幅広く取り上げてきた。創刊以来の蓄積は、土木史研究の多様性を示すと同時に、教育や地域活動、防災といった分野への応用可能性を内包している。一方で、その内容が必ずしも専門外の読者にとって理解しやすい形で届いているとはいい切れず、発信の方法や文脈の工夫が課題として意識されてきた。



写真1 活動報告(石橋知也幹事長)

また、「土木史サロン」は、研究者や実務者に限らず、市民や学生も交えた比較的開かれた場として企画され、人物史や災害、地域の土木遺産などをテーマに議論を重ねてきた。専門的な議論と平易な語りの双方を意識したこの取り組みは、土木史を身近な話題として捉え直す契機を提供してきた一方で、参加者層の固定化や情報の蓄積・共有のあり方といった点については、さらなる工夫の余地があることも明らかになっている。

これらの活動を通じて浮かび上がってきたのが、「土木史は伝えてきたが、必ずしも十分に伝わってきたとは言えない」という問題意識である。研究成果や歴史的事実を発信するだけではなく、受け手が自らの暮らしや地域の課題と結びつけて理解できるような文脈づくりが求められている。

こうした認識を共有する場として位置づけられたのが、本シンポジウムである。これまでの広報活動を振り返りつつ、災害史や教育、次世代への継承といった視点を交えて議論することで、土木史広報の課題を整理し、次の段階へと進むための共通認識を形成することが、本シンポジウム開催の大きな目的であった。写真1に石橋知也幹事長による活動報告の様子を示す。

4. 特別講演「災害史と災害伝承」の要点

本シンポジウムでは、東京大学名誉教授であり、土木学会地震工学委員会において地震防災技術の伝承・教育に関する検討に携わってきた小長井一男氏による特別講演「災害史と災害伝承」が行われた(写真2)。本講演は、災害を単なる過去の出来事として振り返るのではなく、社会においていかに記録され、どのように継承されてきたのか、そしてそれが現在および将来の防災にどのような意味を持つのかを問い直すものであった。

講演の中心的なメッセージは、「災害は同じ場所で繰り返される」という視点である。地震や豪雨などによる被害は偶発的に生じるものではなく、地形や地盤、水系といった土地固有の条件と



写真2 特別講演(小長井一男東京大学名誉教授)

深く結びついており、過去に被害を受けた場所では同様の現象が再び生じる可能性が高いことが、具体的な調査事例とともに示された。にもかかわらず、被害の記憶や記録が十分に共有されないまま時間が経過すると、その教訓は忘却され、同様の被害が繰り返される危険性が高まる。

また、小長井氏は、災害に関する記録や史料が必ずしも正確に伝承されているとは限らない点にも言及した。過去の災害写真や記録の中には、撮影場所や被害状況が誤って理解・伝達されてきた例もあり、そうした誤認がその後の対策や評価に影響を及ぼす可能性があることが指摘された。災害史を扱う際には、史料を無批判に受け入れるのではなく、検証と再解釈を重ねる姿勢が不可欠である。

これらの指摘は、土木史が単なる過去の技術史や出来事の記録にとどまらず、防災や減災といった現代的課題と直結する学知であることを示している。災害の痕跡や記録を丹念に読み解き、それを社会に共有していく営みこそが、土木史の重要な社会的役割であることが、講演を通じて強く印象づけられた。

5. 対談「土木史広報のこれまでとこれから」

続いて行われた対談「土木史広報のこれまでとこれから」では、前土木史広報小委員会委員長である緒方英樹氏と、現委員長である筆者が登壇し、これまでの土木史広報の実践を振り返るとともに、今後の方向性について意見を交わした(写真3)。本対談は、土木史広報を担ってきた世代間の経験と問題意識を接続する場として位置づけられた。

対談の中で繰り返し確認されたのは、「土木は社会に十分に伝わっていない」という認識である。土木は人々の暮らしを根底で支える存在でありながら、その役割や価値は日常的に意識されにくい。緒方氏は、こうした状況に対する問題意識から、土木偉人を題材とした絵本や映像作品、さら



写真3 対談(松永新委員長・緒方英樹前委員長)

には「土木偉人かるた」など、従来の学術的枠組みにとらわれない多様な広報手法に取り組んできた経緯を紹介した。

これらの実践に共通するのは、「伝える」とことと「伝える」ことの違いを意識する姿勢である。情報を一方的に発信するだけではなく、受け手が自ら関心を持ち、身近な歴史や地域の出来事として捉え直す契機をいかに提供できるかが重要であるとの認識が示された。特に、子どもや若い世代に対しては、人物や物語を通じて土木の営みを具体的にイメージできる工夫が有効であることが、実践例を交えて語られた。

さらに、対談では土木史広報の根底にある価値観として、「利他性」が強調された。歴史上の土木技術者や実践者の多くは、自らの名声や利益のためではなく、社会や他者のために行動してきた。その姿勢を伝えることは、現代の技術者にとっても重要な示唆を与えるものであり、土木史を学ぶ意義の一つであると整理された。

これらの議論を通じて、土木史広報は単なる過去の紹介にとどまらず、現代社会における土木の意味を問い直し、次世代に価値観をつないでいく営みであることが改めて確認された。第1回シンポジウムは、その出発点として、今後の土木史広報の方向性を共有する重要な機会となった。

6. 義務教育・次世代への展開と今後の展望

本シンポジウムを通じて改めて確認されたのは、土木史を次世代へどのように継承していくかという課題の重要性である。とりわけ義務教育段階においては、土木史が体系的に扱われる機会は多くなく、個々の教員や地域の取り組みに依存しているのが現状である。しかし、地域の歴史や暮らしと結びついた土木史は、社会科や総合的な学習の時間などを通じて、子どもたちが自らの生活環境を理解するための有効な教材となりうる。

本シンポジウムで紹介された広報実践や対談での議論からは、人物や具体的なエピソードを手がかりに土木史を伝えることの有効性が示された。抽象的な技術や制度としてではなく、人々の判断や行動の積み重ねとして土木史を捉えることにより、学ぶ側が主体的に関心を持ち、地域や社会とのつながりを実感することが可能となる。

今後、土木史広報小委員会としては、教育現場

との連携を視野に入れつつ、これまでに蓄積してきた研究成果や広報資源を、より活用しやすい形で提供していくことが求められる。また、土木史フォーラムや土木史サロンといった既存の場を発展的に位置づけ、多様な世代や立場の人々が参加できる、開かれた対話の場を継続的に創出していくことも重要である。

第1回土木史広報シンポジウムは、その試行的な出発点であった。土木史を「伝える」と「伝わる」ことの差を意識しながら、社会の中で土木史の意義を共有していく取り組みは、今後も継続的に検討されるべき課題である。本シンポジウムで得られた知見と共通認識を踏まえ、土木史広報の実践が、より広がりを持って展開されていくことを期待したい。



写真4 緒方英樹前委員長



写真5 筆者

地域への恩返しと花峯橋の復原

第一工科大学 工学部 環境エンジニアリング学科 4年 竹山廉斗

1. はじめに

1929（昭和4）年に宮崎県日南市の堀川運河に架けられた花峯橋は現在、復原に向けた解体調査が進められている（写真1）（写真2）。筆者は2025（令和7）年の秋、この調査に参加する機会をいただいた。当初は作業に慣れることで精一杯だったが、余裕ができるにつれて、この橋がどのような背景で復原されるに至ったのだろうかという疑問を感じるようになり、卒業研究のテーマとして取り組むことになった。

関連資料の収集を行う過程で、日南市内でスーパーの経営や焼き肉のタレなどを製造する株式会社戸村精肉本店の元社長で、2023（令和5）年11月に逝去¹⁾された戸村サチ子（以下、戸村氏）による日南市への8億円の寄付が復原の大きな要因となっていることを知った。今回、戸村氏と交流のあった地域の方々にお話しをうかがう機会を得ることができたため、本稿ではお伺いした話にもとづいて戸村氏が寄付に至った経緯をまとめるとする。

2. 花峯橋について

(1) 概要

花峯橋は橋長26.8m、幅員6.1mの3径間の木造方杖橋で、土場から運び出される飢肥杉の輸送で利用するために実施された県道整備に伴って堀川運河上に架けられた。油津地区周辺の生活を支えてきた木橋であり、林業が盛んであった日南地域の産業的背景を色濃く反映した土木構造物と言える。

架橋当時の花峯橋は木造桁橋であった。その後、



写真1 花峯橋（2011年撮影）

1963（昭和38）年から1972（昭和47）年の間に輸送手段としてトラックが主流になったことで補強が必要となり、現在の方杖形式になったと考えられている²⁾。現在、木造方杖橋の多くは、後に鋼橋やコンクリート橋への架替や撤去が行われるため、今回の花峯橋のように木橋として復原されることは少ない。

また、日本の近代土木技術を伝える構造物であり、その保存を目的として2004（平成15）年2月17日に登録有形文化財に登録され、2021（令和3）年には土木学会選奨土木遺産に認定された。

(2) 復原に至るまでの経緯

道路橋として利用され続けていたために徐々に老朽化が目立ち始め、2003（平成15）年には2t車以上通行禁止の措置が取られた。2013（平成25）年8月1日には部材調査とその結果による補強補修及び架替の検討が実施され、部材の腐食が著しい為補強は不可能であることから架替を行うという結果が出た。2014（平成26）年3月28日に開催された油津デザイン会議では現況報告が行われ、稲本副市長より、木橋での架替を考えているが工法によっては文化財の抹消もやむを得ないとの考えもみられた。また、2019（平成31）年3月には市議会で市道花峯橋線廃止議決され、利用できない状況が続いていた³⁾。

当時の橋の劣化状況としては、方杖脚部及び端部主桁の腐食が著しく、補修等の対応を行わず車両等の通行を継続した場合、落橋などの重大な事故が発生する可能性があるとしていた。2013（平成25）年に実施された調査診断の結果では、わずかな荷重超過及び衝撃を加えると崩落の危険がある状態とされた。

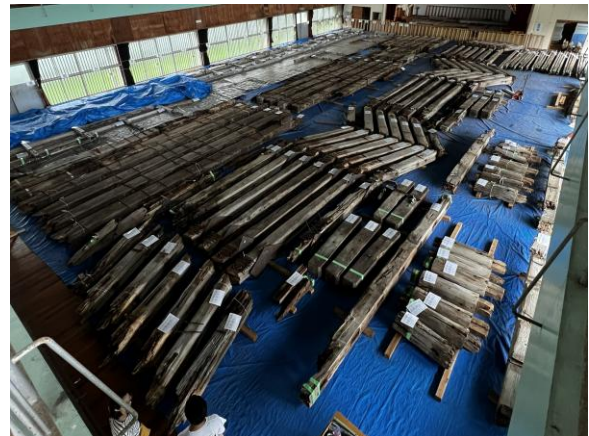


写真2 解体された部材置き場

その後、大雨で一部の部材が崩落するなど危機的な状況が続いていたが、2021（令和3）年12月末に戸村氏が日南市に対して8億3,000万円を寄付したことをひとつのきっかけとして、復原事業が本格的に進められることとなった。

3. 寄付の背景

聞き取りを通じて、戸村氏は地元に対する強い思いを抱いていたことがうかがえた。ここでは、夫の故・吉守氏とともに日南市内で展開していた事業や、戸村氏にまつわるいくつかのエピソードから、寄付へと至った思いの背景にある郷土愛とも言うべき一面について述べる。

(1) 寄付の内容

報道によれば、日南市などに対する寄付は創業者である夫の吉守氏が始めたもので、総額は市町村合併前の1990（平成2）年から32年間にわたって累計約9,100万円以上に上り、小学校の図書費などに充てられていた。戸村氏は今回の寄付の理由について「地元のお客様から預かったお金を還元する気持ち。お客さまに助けていただいて今がある」と話しており、8億円は油津地区の歴史・文化の伝承に、3,000万円は市内の小中学校の図書の整備・充実に使ってほしいとしている⁴⁾。

(2) 地域に密着した事業展開

戸村氏の「地元のお客様から預かったお金を還元する気持ち。お客さまに助けていただいて今がある」という言葉を踏まえ、その背景にあると思われる株式会社戸村精肉本店について調べたところ、同店が地域社会にどのように根差し、現在までにどのような成長および発展を遂げてきたのかがわかった。

1965（昭和40）年に創業した戸村精肉本店は1973（昭和48）年11月に現在の「堀川レストラン」とむら（写真3）となる戸村焼肉専門店を開業し、1981（昭和56）年7月に農事組合法人戸村畜産を設立した。その後、1984（昭和59）年8月にスーパーとむらの一号店となる木山店



写真3 レストランとむら

を開業し、吾田店、鉄肥店、北郷店と続いた。その後、木山店が移転開業した油津店、食彩館とむらをリニューアルオープンした星倉店を開業した⁵⁾。日南市の地図（図-1）で見ると、現在の日南市内の主要な地域に展開していることがわかる。また市外には出店していないことも、地域との関係の深さをうかがわせる。なお、2021（令和3）年3月23日に大分のマルミヤストアが全株式取得を発表している。

(3) 地域の自然や文化へのまなざし

戸村氏は写真愛好家で、生前は仲間とともに撮影に出かけ、日南周辺で動植物や棚田等の風景を対象とした写真を数多く撮影していたそうである。撮影の対象は動物や花、自然の風景のほか棚田や神社など幅広く、写真は店舗内の各所に展示し、時々写真を取りかえて愛する日南市の風景を地域住民に届けておられたそうである。経営者が変わった現在でも氏が撮影した写真の一部は事務所で保管され、店内に飾られ続けられている（写真4）。

写真5は戸村氏が撮影した花峯橋の写真である。橋の状況から、かなり老朽化が進行した時期に撮影されたものと推察される。「歴史を紡ぐ橋（花峯橋）」と題されたこの写真は、戸村氏が生前一人で暮らしていた自宅に現在も飾ってある。

(4) 郷土に対する思い

今回、写真仲間であったテレビ宮崎の川床氏にお話を伺うことができた。川床氏によると、戸村氏は堀川運河周辺で事業を展開し、経営を支えてくださった地域の皆さん、そして堀川運河に恩返しをしたいという思いを持っておられた。

さらに自身や亡き夫の名義で学校の書籍購入代として毎年のように私財を寄付しており、市内の小中学校ではそれが「戸村文庫」として親しまれている⁶⁾。そして、油津地区がもつ古い歴史を子供たちに残していきたいという思いから花峯橋と資料館のために寄付をされたと言われた。また、夫の吉守氏はフェニックスリゾート創業者である佐藤棟良氏の「地域を大切にする」という考えに共感しておられ、戸村氏もその思いをしっかりと受け継いでおられるそうである。



図-1 スーパーとむら店舗（地理院地図より作成）

4. おわりに

消滅の危機にあった花峯橋が復元へと至った背景には、戸村氏による多額の寄付があった。その寄付は単なる資金提供ではなく、会社を支えてくれた地域やそこに暮らす人々への深い感謝の思いが込められたものであった。

私は、戸村氏がそれほどまでに地域に強い関心と愛着を抱いていたことに大きな衝撃を受けた。今後、土木遺産を保存していくためには、行政や自治体が地域の歴史や土木遺産について学ぶ機会を設け、地域に誇りと愛着を持つ人材を育てていくことが重要であると考えます。

参考文献

- 1) 宮崎日日新聞 2024（令和6）年2月29日付
- 2) 文化財保存計画協会：第1回花峯橋復原整備検討委員会資料
- 3) 日南市建設課：花峯橋改修事業資料，2015（平成27）年2月16日
- 4) <https://www.nichinan.tv/2022/02/02/tomura-kifu32/>（日南テレビ 2022（令和4）年2月2日）
- 5) <https://www.tomura.com/publics/index/3/>（株式会社戸村精肉本店）
- 6) <https://www.asahi.com/articles/ASQ237GBHQ23TNAB00C.html>（朝日新聞 2022（令和4）年12月25日付）



写真4 総菜コーナーに展示された写真

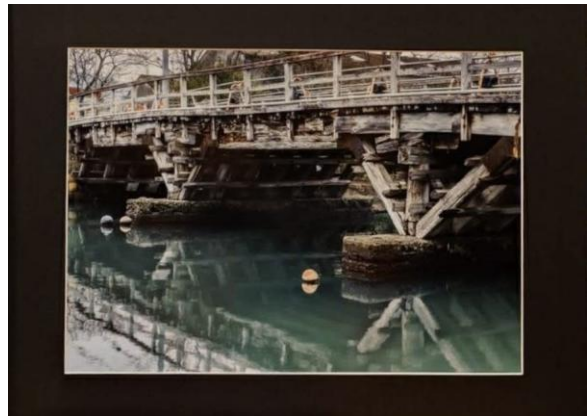


写真5 戸村氏が撮影した花峯橋の写真（川床氏提供）

地域のニュース 2

「アートでつなぐ旧晴海鉄道橋展」 開催報告

豊洲機関区 藤間さちお

2025年12月、江東区豊洲シビックセンター1階ギャラリーにおいて、イラストアート展「アートでつなぐ旧晴海鉄道橋展」を開催した。本展は、2025年9月に遊歩道として再生した旧晴海鉄道橋を題材とし、橋の保存・再生を地域の出来事として伝えることを目的としたものである。旧晴海鉄道橋は、管理者である東京都により約3年をかけて保存工事が行われ、外観や構造の特徴をできる限り残した形で遊歩道として整備された。

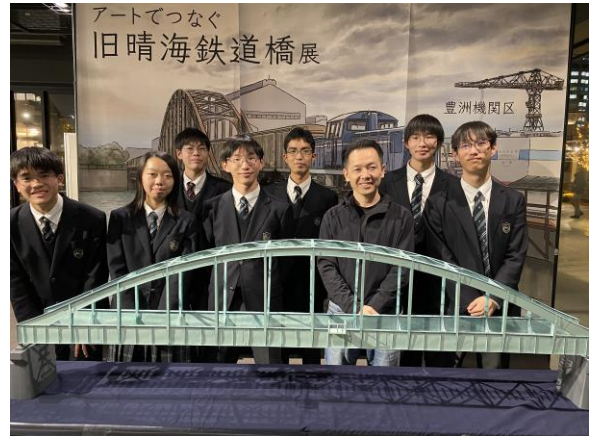


写真1 春海橋公園遊歩道(旧晴海鉄道橋)

旧晴海鉄道橋は1957(昭和32)年、東京港に陸揚げされた物資を運ぶ臨港貨物路線(東京都専用線・晴海線)の一部として春海運河に架けられた。戦後復興期の東京を物流面から支えた貨物列車が行き交ったが、モータリゼーションの進展などを背景に1989(平成元年)年に廃線となり、以降は長く使われない状態が続いていた。

会場となった約220平方メートルのギャラリーには、旧晴海鉄道橋を中心に約50点の筆者が作成したイラスト作品をはじめ、立体模型や実物資料、協力者から提供された模型などを展示した。専門的な解説や写真のみで構成された展示ではなく、アート表現を通じて来場者が感覚的・視覚的に橋の存在や歴史を理解できる構成としたことが特徴である。

エントランスには、全長約3.5メートルの旧晴海鉄道橋大型模型を設置した。この模型は、地元の芝浦工業大学附属中学高等学校 鉄道研究部の生徒たちが当時の図面を基に製作したもので、鉄道橋として使用されていた頃の姿を忠実に再現している。来場者は最初にこの模型を見ることで、橋のスケールや構造を体感的に理解することができた。

写真2 大型模型を作成した芝浦工業大学附属
中学高等学校 鉄道研究部の生徒達と筆者

旧晴海鉄道橋は、鉄道用として日本初の鋼ローゼ橋であることや、側径間に3径間連続PC桁を採用し、鉄道橋として日本初の連続PC桁である点など、土木技術史の面でも高い価値を有している。保存・遊歩道化事業では、こうした技術的特徴が表れた部分を可能な限り残す配慮がなされており、本展ではそれらを分かりやすく伝えるため、精緻なイラストと簡潔な解説を組み合わせで紹介した。



写真3 アート展示風景

また、臨港貨物線で活躍した蒸気機関車やディーゼル機関車をイラストや図面で紹介し、最盛期には年間170万トンもの貨物を扱っていた当時の様子を伝えた。東京都から提供された、機関車に取り付けられていた東京都章エンブレムの実物大レプリカや、実際に走行する鉄道ジオラマも展示され、鉄道に親しみのない来場者からも関心

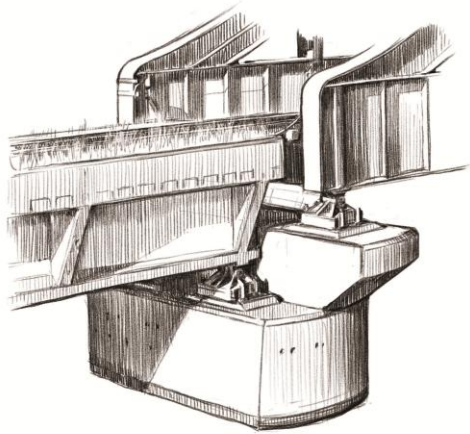


図-1 鋼ローゼ橋とPC 橋掛違い部の筆者作成イラスト

を集めた。これらのジオラマも、前述の高校生たちによる製作であり、世代を超えた地域参加型の展示となった点も本展を特徴づける要素の一つである。



写真4 鉄道研究部作成の臨港線当時のジオラマ



図-2 旧晴海鉄道橋の臨港線当時の様子（筆者作成）

会場内には、旧晴海鉄道橋を舞台にした漫画作品を大きく引き伸ばして展示し、橋を巡る物語を楽しめる構成も取り入れた。史実に基づきながらも物語性を加えることで、橋を単なる構造物としてではなく、記憶や想像を喚起する存在として捉えてもらうことを意図した。

会期中には、橋の設計者・田島二郎にまつわるエピソードなどを紹介するトークイベントを、橋の愛好家である紅林章央氏（(公財) 東京都道路整備保全公社）をゲストに招いて開催したほか、展示鑑賞後に実際の橋を訪れるウォーキングガイドツアーも実施した。展示会場と現地が徒歩圏内にある立地を生かし、資料と実物の両方に触れられる体験は、参加者から好評を得た。

展示の締めくくりとして、遊歩道に設置された解説板のデザインや、本展のために描き下ろしたイラスト作品「Parade」を紹介した。旧晴海鉄道橋がこれからも人々をつなぎ、地域に親しまれる存在であり続けることを願い、橋と周辺の風景、人々の往来を一体として表現したものである。

かつては廃線後に長く使われず、都心の中で静かに佇んでいた旧晴海鉄道橋は、現在では地域の



図-3 本展のために書き下ろした、キービジュアル "Parade"

新たなランドマークとして再生した。本展は、橋という土木構造物が地域資産として再評価され、次世代へ継承される過程を共有することを目指し、鉄道・橋梁ファンはもちろん、アートや地域

を愛する方との「共創型展示」として、クラウドファンディングにより開催した。75 人の方々の支援により目標金額を達成し、無事開催できたことを感謝する。



写真5 会場風景



写真6 来場者の記念撮影コーナー

学会の動き

第10回土木史サロン 開催報告

土木史広報小委員会 委員 白木綾美

第10回土木史サロン

新たな国土と未来を創った浅野総一郎 ～その現在の意義とは何か～

日時：2025年10月23日(木) 14:00～16:30

場所：土木学会講堂（四ツ谷）及びオンライン

主催：公益社団法人 土木学会 土木史委員会
土木史広報小委員会

参加数：対面：70名（満員）

オンライン：700名（満員）

1. プロローグ：臨海工業地帯建設の先進的モデルとなった浅野総一郎の埋め立て事業

発表者：緒方英樹氏（土木史広報小委員会 委員長）

戦後の京浜工業地帯が東京発展の原動力となり、日本の高度成長を牽引した背景を説明。日本の臨海部の将来像を総合的に考え、土木の原点を見直す上で、東京湾臨海部がどのような理念でつくられてきたかを振り返った。江戸時代初期の手結港や徳川家康による日比谷入江の埋め立てから東京湾埋立の歴史を辿り、明治以降の東京港が抱えていた課題と、浅野総一郎の壮大な構想を紹介した。浅野の「世の中に不要なものはない」という発想と、横浜港と東京港を結ぶ運河建設、その掘削土砂を利用した埋め立てによる「港と運河と埋立の一石三鳥」のユニークなアイデアが説明された。

2. 講話1：新発見資料でよみがえる浅野総一郎のビジョン「幻の東京湾改造計画」と「山形要助文書」(14:30～15:00)

発表者：伏見岳人氏（東北大学公共政策大学院 院長／東北大学大学院法学研究科 教授）

2023年に公開された「後藤新平関係文書」や「山形要助文書」といった新発見資料から、浅野総一郎が提唱した「幻の東京湾改造計画」が再評価された。この計画は、実現した「浅野埋立」よりもはるかに大規模で、横浜港と東京市を運河でつなぎ、沿岸一帯を「理想的商工地域」とする壮大なビジョンであったことが示された。東京市の反対により挫折したものの、100年後にそのビジョンが復元された意義を語った。

3. 講話2：総一郎の夢を叶えた土木技術者 関毅(せき・はたす) (15:00～15:30)

発表者：八田修一氏（一般社団法人台湾世界遺産登録応援会 理事）

浅野総一郎の夢を支えた土木技術者である、山形要助と関毅に焦点を当てて解説。浅野が京浜工業地帯の事業に着手する直前の1912年には、台湾・高雄の打狗港（だくこう）の築港と埋め立て事業を行っており、これが京浜工業地帯の埋め立てのルーツとなったことを紹介。山形要助は高雄港の築港計画を立案し、浅野の求めに応じて京浜運河の設計も行った。八田氏は、祖父である八田與一技師と親友・関毅との関係にも触れ、土木技術者たちの功績を後世に伝える重要性を伝えた。

4. ご挨拶(15:30～15:35)

発表者：浅野一氏（浅野学園 理事長）

5. 対談：「鶴見・川崎臨海の埋立事業、その現在の意義とは」(15:40～16:15)

登壇者：伏見岳人氏、八田修一氏

ファシリテーター：白木綾美氏（土木史広報小委員会 委員）

伏見氏と八田氏による対談では、浅野総一郎の事業が現代に持つ意義について議論した。伏見氏は、日本政治外交史の観点から土木の歴史を捉え、浅野の東京湾改造計画が幻に終わった理由や、今浅野総一郎を取り上げる意味について言及。八田氏は、八田與一技師と関わった土木技術者たちの関係、特に山形要助、廣井勇、関毅とのつながりを解説し、土木技師が社会基盤を築いた功績を後世が顕彰すべきだと述べた。浅野が埋立だけでなく、働く人々のための環境整備も行った点が、八田與一技師の「安心して働ける環境づくり」に通じるという視点も提示した。最後にまどみちおの詩「朝がくると」を朗読して終了。

6. 会場との質疑応答(16:15～16:25)

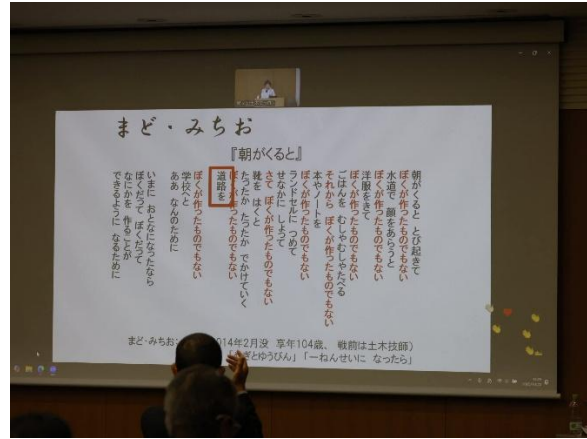
7. 閉会挨拶(16:25~16:30)

発表者：石橋知也氏（土木史広報小委員会 幹事長）

8. 感想

- 浅野総一郎の埋立・臨海工業地帯構想や近代化への貢献を改めて学んだ。
- 戦後復興や産業発展に尽くした先人たちへの敬意・感動が多い。
- 講演内容が自身の業務（橋梁設計、地盤改良など）に参考になった。
- 江戸～現代を通じた土木の連続性や文化的価値への興味。

- 初めて知った人物や事例に対する驚き・新知見の獲得。
- 土木の歴史を学ぶことが今後の国土・未来を考える示唆になる、という総括的評価。
- 全体の構成が分かりやすく、要点が整理されていた。
- 議論や追加調査、今後掘り下げたいテーマが明確になった。
- まどみちお氏の詩「朝がくると」の朗読が心に響いた。
- × 説明の専門性が高く平易さに欠ける
- × 図表・写真の説明不足
- × 議論・質疑応答が不十分



History by Your Side

第10回 土木史サロン

新たな国土と未来を創った浅野総一郎 ～その現在的意義とは何か～

2025年10月23日(木) 14:00～16:30
土木学会 講堂 (オンライン併用)

参加
無料

【申込方法】
対面/オンライン
を選択して
お申し込み
ください

対面



[https://www.jsce.or.jp/
events/form/412503](https://www.jsce.or.jp/events/form/412503)

オンライン



[https://www.jsce.or.jp/
events/form/4125031](https://www.jsce.or.jp/events/form/4125031)

全体司会：中野朱美

土木学会CPDプログラム2.5単位

プロローグ

臨海工業地帯建設の先進的モデルとなった浅野総一郎の埋立事業
緒方英樹 (土木史広報小委員会 委員長)



東亜建設工業株式会社提供

講話 (各30分)

- 新発見資料でよみがえる浅野総一郎のビジョン
- 「幻の東京湾改造計画」と「山形要助文書」
伏見岳人氏 (東北大学公共政策大学院 院長/東北大学大学院法学研究科 教授)
- 総一郎の夢を叶えた土木技術者 関毅 (せき・はたす)
八田修一氏 (一般社団法人台湾世界遺産登録応援協会 代表理事)

対談 (40分) 鶴見・川崎臨海の埋立事業、その現在的意義とは
登壇者 伏見岳人氏 (前掲)・八田修一氏 (前掲)
ファシリテーター 白木綾美 (土木史広報小委員会 委員)

会場との質疑応答

ご挨拶 (5分)

浅野一氏 (浅野学園 理事長)



【会場周辺図】

【主催】 公益社団法人 土木学会
土木史委員会 土木史広報小委員会
【お問合せ】 研究事業課 担当：田村幹貴
03-3355-3559 m-tamura@jsce.or.jp

JSCE 土木学会
JAPAN SOCIETY OF CIVIL ENGINEERS
〒100-0004 東京都新宿区四谷1丁目 外港公園内
<https://www.jsce.or.jp>

編集後記

今年の土木史研究発表会は熊本大学にて開催されます。昨年よりも多くの方にご発表いただけるようです。私も共同研究者として発表する他、土木史研究発表会では初めての司会もあって楽しみにしています。シンポジウムは「災害からの復興と土木史」について、エクスカーションでは国宝通潤橋の見学が予定されています。(中川)

土木史フォーラム No. 57 2026. 06. 15

監 修 : 土木学会 土木史委員会

発 行 : 土木史広報小委員会

代表者 松永昭吾

横浜国立大学 元気なインフラ研究所 所長

事務局 : 中川嵩章 Email : nakagawa.t.9af1@m.isct.ac.jp

土木史委員会HP

<https://www.jsce.or.jp/committee/hsce/index.htm>

CONTENTS

-FORUM

Report on the 1st Symposium on the Promotion of Civil Engineering History: Shogo Matsunaga 1
An Effort to Share the History of Civil Engineering and Pass It on to Future Generations

-LOCAL NEWS 1

Giving Back to the Community and the Restoration of Hanamine Bridge Rento Takeyama 5

-LOCAL NEWS 2

Report on the “Connecting Through Art: The Former Harumi Railway Bridge Exhibition” Sachio Fujima 8

-REPORT FROM CHCE (Committee on the History of Civil Engineering)

Report on the 10th Salon on the History of Civil Engineering Ayami Shiraki 11